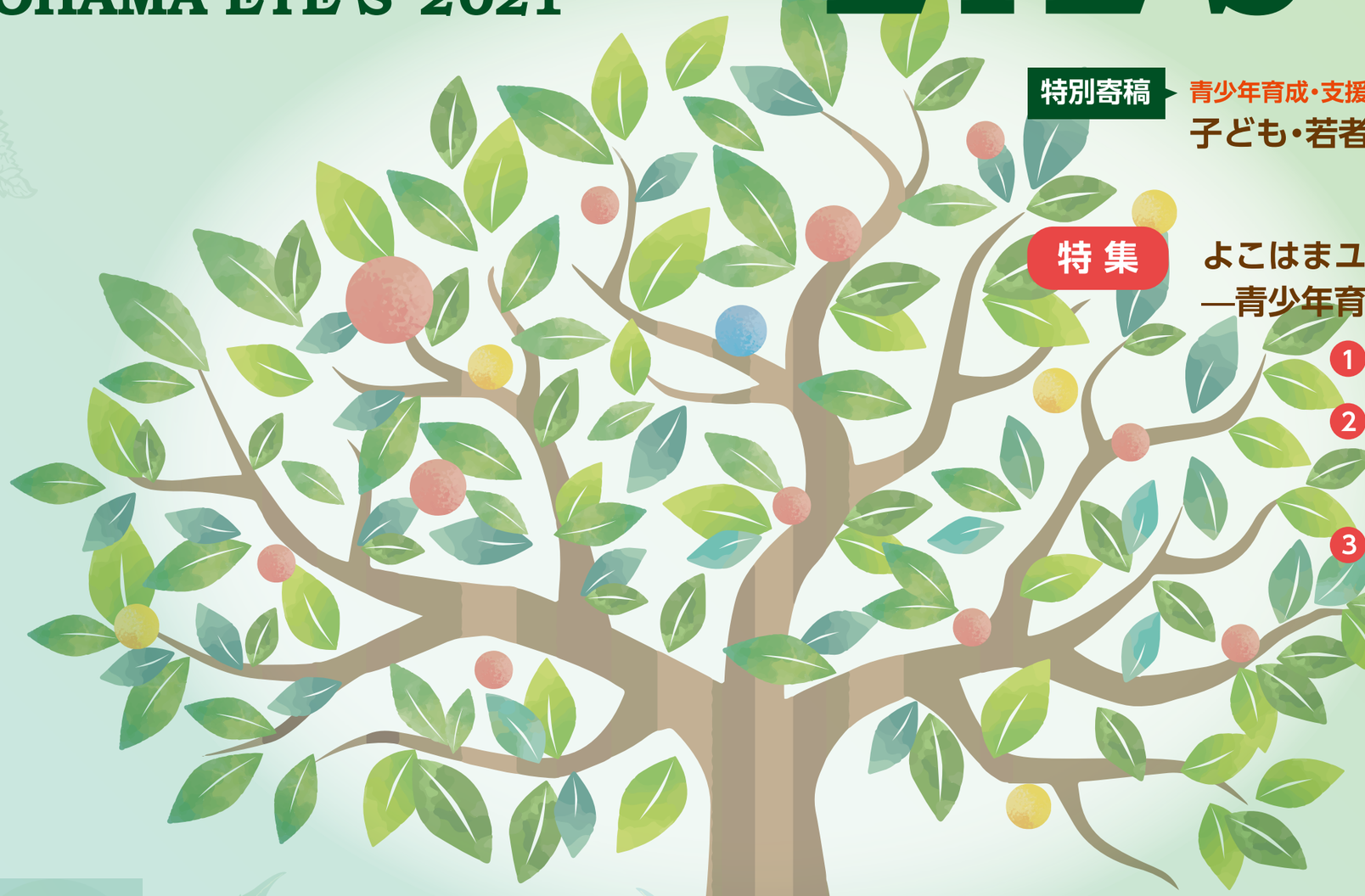
ヨコハマの子ども・若者の成長を応援する人たちへ

YOKOHAMA EYE'S 2021

ヨコハマ アイズ 2021

YOKOHAMA EYE'S 2021



特別寄稿

青少年育成・支援の10年をふりかえる

子ども・若者の生の全体性の回復に向けて

萩原 建次郎（駒澤大学）

特 集

よこはまユースの10年
―青少年育成とユースワークをつなぐ―

1. 年表「よこはまユース10年の歩み」
2. 職員座談会
「よこはまユースの事業から見る
青少年育成の10年」
3. 職員寄稿「2011→2020→」

事業報告

2021年度
子ども・若者
エンパワメントセミナー

「3.11を振り返って
～あの日の話、明日の話～」

- 第1部：講演会
  石井 光太（ノンフィクションライター）
- 第2部：ディスカッション

公益財団法人よこはまユース

はじめに

よこはまユースが公益財団法人として認可を受けてから2021年４月で10年をむかえました。この10年間で、価値観や生活様式がますます多様化し、地域社会での関係性の希薄化や体験機会の減少が青少年の課題として取り上げられるようになり、現在はその課題にコロナ禍が拍車をかけています。

本号では、この10年間をふりかえり、青少年を取り巻く環境や課題の変化、そしてよこはまユースが担う役割の変化について取り上げました。

冒頭の特別寄稿「青少年育成・支援の10年をふりかえる―子ども・若者の生の全体性の回復に向けて」では、青少年政策や青少年課題の変化、そして青少年育成・支援における今後の大切な取組みについて駒澤大学の萩原建次郎教授から寄稿いただきました。

特集では、年表、職員座談会、職員寄稿「2011→2020→」の三部構成で、青少年育成施策や青少年課題、よこはまユースに求められる役割の変化を振り返りました。

事業報告では、2021年12月11日に実施した「2021年度子ども・若者エンパワメントセミナー」を取り上げました。第一部はノンフィクションライターの石井光太氏の講演の要約、第二部は横浜の学生と釜石の高校生がオンラインで行ったディスカッションの要旨を掲載し、東日本大震災から10年を経て変わったこと、そして決して変わることのない大切な思いを整理しました。

よこはまユースは、つながりを大切に大人も子どもも共に成長できる地域を醸成していくという普遍的な理念のもと、青少年を取り巻く状況の変化に対応し、横浜市の青少年育成活動を推進してまいります。皆様におかれましては、引き続きご理解とご協力をお願い申し上げます。

2022年３月末日
公益財団法人よこはまユース
代表理事　　大向　哲夫

YOKOHAMA EYE'S 2021 目次

特別寄稿

青少年育成・支援の10年をふりかえる …… 4
～子ども・若者の生の全体性の回復に向けて～

萩原 建次郎（駒澤大学）

特　集

よこはまユースの10年
―青少年育成とユースワークをつなぐ―

1 年表「よこはまユース10年の歩み」 …… 8

2 職員座談会 …… 10
「よこはまユースの事業から見る青少年育成の10年」

3 職員寄稿
「2011→2020→　」 …… 18

事業報告

2021年度 子ども・若者エンパワメントセミナー
「3.11を振り返って ～あの日の話、明日の話～」

- **第一部　講 演 会（要旨）** …… 20
  石井 光太（ノンフィクションライター）
- **第二部　ディスカッション（要旨）** …… 24

特別寄稿

青少年育成・支援の10年をふりかえる
―子ども・若者の生の全体性の回復に向けて

駒澤大学
教授　萩原建次郎

1．子ども・若者の成育環境の現代的特徴

（1）個体の能力開発で構成された世界

青少年育成・支援は、この10年で大きな転換を迎えた。戦後、長らく青少年施策の柱は健全育成と非行対策であったのが、包括的な子ども・若者支援へと転換したからだ。その契機となったのが2009年（平成21年）に制定された「子ども・若者育成支援推進法」である。また、ひきこもりやニートが社会課題となり、「生きづらさ」「貧困」「自立」「居場所」が青少年施策のキーワードとなったことが大きい。

図表１　日本で教育目標とされる能力概念の一覧表

名　称	機関・プログラム	年
生きる力	文部科学省	1996
エンプロイヤビリティ	日本経営者団体連盟（日経連）	1999
リテラシー	OECD-PISA（生徒の学習到達調査）	2000-15
人間力	内閣府(経済財政諮問会議)	2003
キー・コンピテンシー	OECD-DeScCo（コンピテンシーの定義と選択）	2003
就職基礎能力	厚生労働省	2004
社会人基礎力	経済産業省	2006
就業力	文部科学省	2008
21世紀型スキル	ATC21S（インテル、シスコ、マイクロソフト）	2010
21世紀型能力	文部科学省（国立教育政策研究所）	2012

松下佳代『高校・大学から仕事へのトランジション―変容する能力・アイデンティティと教育』ナカニシヤ出版, p. 92, 2014 より作成し、萩原が新たに加筆

では、こうした国全体の青少年施策の転換の社会背景となる、現在の子ども若者の成育環境の特徴はどのようなものか。

図表１は子ども・若者が将来獲得すべき能力概念についての一覧である。これらを見ると、個人の能力発達に対する、国や経済産業界からの過剰ともいえる期待が注がれてきたことがわかる。文部科学省が1996年に提唱した「生きる力」は、グローバル経済社会を背景として、絶えざる社会変化に適応する能力として登場している。これが基本形となり、その後もさまざまな能力概念（例えば「人間力」「就職基礎能力」「21世紀型能力」など）が提唱されていることがわかる。

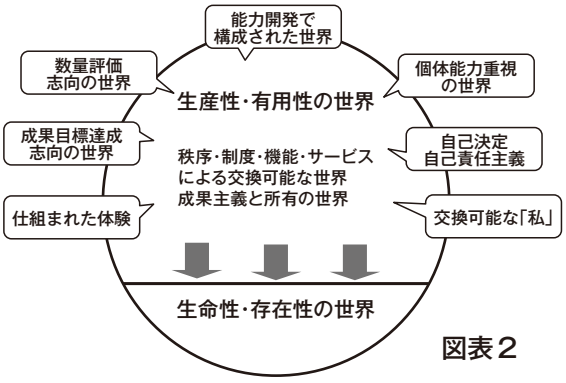
（2）進行する子ども若者の自己の空虚化

このような「○○力」提唱の背後には図表２に示したように、経済を回すことを主目的とする「生産性と有用性の世界」がある。この世界の特徴は図表に示したように、能力開発で構成された世界であり、個体能力重視の世界ゆえに自己決定・自己責任重視の世界でもある。

この世界はあらゆる生の諸側面や諸活動を数量化（見える化）し、成果目標を設定し、予測可能なものへ変換し、結果を重視するところに特徴がある。OECD（経済開発協力機構）が示したキーコンピテンシーのように、人間の生のあらゆる営みを「能力の束」とみなし、仕組まれた体験・学習プログラムでその能力開発と成果を求める世界である。

こうした世界観に基づく教育が子ども・若者にどの

子ども・若者の成育環境の現代的特徴



図表２

ような自己形成をもたらすのか。それを示したのが図表に示した「交換可能な『私』」である。人間存在を個体の能力発達に還元し、数量化し、意図的計画的に仕組まれたプログラムでその能力を開発する。その結果、出来上がるのは経済産業界にとって有用な人材である。これは、個別具体的な子ども・若者にとってすれば、「自分でなくてもよい」「誰がなってもかまわない」交換可能な自己ということになる。

とりわけこの10年間で頻発している若者の無差別殺傷事件の特徴として、犯行の動機で語る言葉は「殺す相手は誰でもよかった」「社会に認めてもらいたかった」である。事件を起こした若者が非正規雇用労働者・期間労働者であったり、家族・親戚縁者からも離脱して、居場所無き人生を生きていたりと、彼ら自身が「取り換えのきく誰でもよい存在としての自己」を背負っていたことも特徴である。産業社会がグローバルな経済競争でしのぎを削り、生産性と有用性の世界に注力し、子ども若者世代に「教育」と称してその価値を浸透させればさせるほど自己の空虚化は進行する。近年の若者事件はその一つの証左でもある。

2. 自立の意味を問い直す

（1）自立と自己決定・自己責任主義が生み出す孤立

2003年（平成15年）の内閣府「若者自立・挑戦プラン」以降、青少年施策に「自立」が強調されてくる。今では若者支援というと自立支援と同義かと思われるほどに、「自立」がキーワードである。では「自立」とはどういうものとして期待されているものなのか、何をもって自立となすのか。そこもよく見ておく必要がある。

図表２のような近代産業社会が進行した現代における「自立」の在り様について、教育哲学者の高橋勝（横浜国立大学名誉教授）は次のように指摘する。

> *モダニティが進行して、社会が激しく流動化しはじめると、人々は共同体における身近な他者から切り離されて、不特定多数の他者と関わらざるをえなくなる。それは、社会変動によって、人々が安定した共同体を失って孤立し、濃密な関わり合いを喪失することを意味している。個人が共同体から「自律※すること」は、同時に「孤立すること」とほとんど背中合わせとなる。（高橋勝編著『子ども・若者の自己形成空間』東信堂, 2011年, 18頁）*
>
> ※引用者注：「自律」は本稿での「自立」を指す。

このような共同体からの離脱を促進させてきたのは、近代の黎明期から現代に至るまで人々を魅了してきた「解放のポリティクス」であると、高橋は指摘する。それは長いあいだの近代化を裏支えしてきた個人の自由と自立意識を促す原理である。封建社会や全体主義国家のように不平等や自由の抑圧がなされる体制下では、「自立」の原語であるindependence（独立、自立、抑圧状態からの解放）の原理は有効に働く。しかし、ここまで見てきたように、生産性と有用性重視の世界が肥大化し、個人の能力発達に過剰な期待がかかる自己責任社会においては、自由と自立の原理は有効に働くどころか、個人をより一層孤立へと追いやり、他者や社会と没交渉（これもindependenceのもう一つの意味である）となっていく。それは子ども・若者の現代的貧困とも深く結びついていく。

（2）現代的貧困の特徴と自立志向の社会が生み出す生きづらさ

現代的貧困が戦後直後の貧困と大きく異なるのは、より高度化した近代の現在にあって、家族、親戚縁者、学校、地域といった身近な共同体が脆弱となり、いざというときに頼れる身近な他者がおらず、友だち関係や遊び仲間さえも作れない、遊びを通した多様な体験も享受できないといった「関係の貧困」と「体験の貧困」が加算されている点である。

むしろここでは、自由と自立の原理（解放のポリティクス）に伴う身近な共同体からの離脱と断絶が生み出す関係の貧困が、経済の貧困に先行して広汎に生じている点が戦後直後の貧困と大きく異なる。戦後の先行世代が信じて疑わない自由と自立の原理が招いた事態であることに気づかず、さらに**子ども・若者を自立原理で追い立てることは、彼らの生きる意欲や自尊感情を奪う結果しか生まないことに早く気づく必要がある。**

このように理解すると、近代化の推進・啓蒙機関として機能してきた学校において、高校進学率が９割を超えた1970年代中頃から不登校発生率が増加の一途となったのもわかる。それは子ども･若者にとって、学校での学びに連なる生産性と有用性の世界へ参入（＝自立）が、もはや希望や願望ではなくなったことの現れとして見ることができる。

さらに、社会に出ること自立することが、円滑に社会を回すために強いられた外発的な自立でしかないことを、子ども時代から身に沁み込ませてきた結果として、社会を目前にして身がすくみ、ひきこもるのも当然といえる。

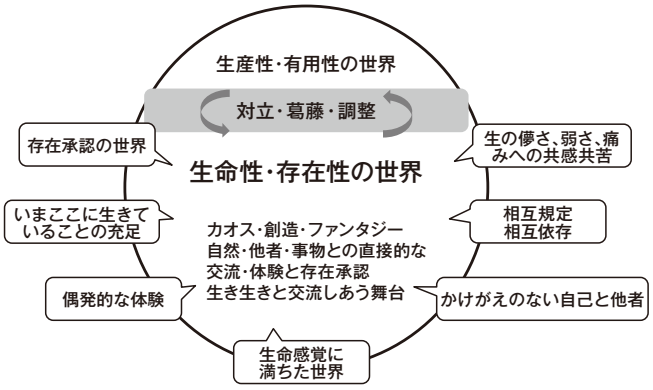
では、現代の成育環境に決定的に欠けているもの、子ども・若者の健やかな育ちにおいて欠くことのできない世界とは何だろうか。

3. 青少年育成団体が自立支援に取り組むことの意義 ―健全育成と自立の関係性

（1）健全育成活動が根差す世界―生命性・存在性の世界

人間の生には「生命性・存在性の世界」といえるもう一つの側面がある。それは**図表３**に示したような生命感覚に満ちた世界、いまここに生きていることの充足感や歓びを感得する世界である。同時に自然や事物との直接的な体験や同世代や他世代との交流を通じて、互いの存在を感じ、認めあう存在承認の世界でもある。失敗や挫折、病、老いや死といった人間の弱さや生の儚さ、それへの共感共苦を含む世界でもある。また、体験は偶発性に富み、人間の意図や計画を超えた側面を持つ。この世界は宮崎駿が手掛けてきたアニメ作品群においてもイメージ豊かに描かれている。

図表３　子ども・若者の生の全体性



例えば「となりのトトロ」では子どもにしか見えない森の妖精トトロとの交流を描いているが、４歳の女の子メイに映る世界はまさに生命感覚とファンタジーに満ちた世界である。彼の初期作品「未来少年コナン」で登場する少年コナンも生命力あふれた子どもの象徴として描かれている。コナンを捕まえようとする人間はインダストリアという、科学技術が築き上げた未来世界に生きる大人の象徴として描かれている。コナンはその持ち前の生命力と野生的な力で大人たちをてんてこ舞いにする。子どものもつカオス性や生命性によってインダストリアの世界（＝生産性と有用性の世界）は揺さぶられるが、コナンにかかわると、その大人たちまでもがいつしか人間味を帯びて活き活きとしていく。

このように生命性・存在性の世界は、子ども・若者のもつ生命の躍動や、場を根源的に活性化させる意味でのカオス性を含み、時として大人社会の規範や既成秩序からはみだし、揺さぶる要素を含んでいる。これを居場所づくり実践に置き換えるならば、「子ども・若者の存在欲求に寄り添った居場所であ

ろうとすること」と「既成秩序を維持形成する大人から見た安心安全の居場所であろうとすること」との対立・葛藤・調整のせめぎあいと符合する。

（2）かけがえのない自己と他者の感受と関係的自立

再び宮崎の作品を例えにするが、「千と千尋の神隠し」では、現代の消費型社会に浸る家庭に育つ千尋という少女が異世界に迷い込むところから物語が始まる。彼女はハクという少年に助けられ、湯屋で働かせてもらうことと引き換えに名前をはく奪されてしまう。一所懸命実直に湯屋で客をもてなし、仲間を助けて働くことを通して彼女は再び名前を取り戻す。この物語では現代を生きる少女が、多様な他者との濃密なかかわりあいを通して、かけがえのない自己（本来の名前）を取り戻し、かけがえのない他者とも出会っていく。このように生命性・存在性の世界は、全心身をかけて他者とかかわり、自然や事物と格闘して得られる相互の存在承認の中で、交換不可能な「私」を感受する世界である。

この世界こそ、青少年育成団体が日頃の実践で展開してきた世界ではなかったか。ジュニアリーダーのお兄さんお姉さんに引率されての子ども会の野外キャンプやお楽しみ会、地域のおじいちゃん、おばあちゃんに教わる昔遊び、ボーイスカウト・ガールスカウトが得意とする冒険的で挑戦的な野外活動など、異年齢や多世代との交流や自然との濃密な触れあい交流活動などはすべてこの生命性・存在性の世界に根差している。

子ども・若者の自立の根っこにそうした世界の裏支えがあり、人間の弱さや痛みに寄り添える意味ある他者との安心と信頼のネットワークがあってこそ、自ずから立っていくのだ。

4. 今後の青少年育成・支援の課題
―生の全体性を回復する成育環境の再構築

「生きづらさ」「困難さ」というのは人生において最初から固定化されたものであったり、特定の子ども・若者だけが抱えたりするものではない。これまで述べてきたように、個人の自由と自立の原理を強力に働かせた現代社会では、だれもが生きづらさを根底に抱えやすい。生きづらさを個々の人生のある状態・状況として見直すことで、普段の健全育成活動の延長上に自立支援や、困難さに寄り添う支援は自ずと生まれてくるだろう。

子ども・若者からすれば活動に参加することで、日々の生きる意欲や心の糧を得て、困難な状況をいなしたり、それが深刻になる手前で回避したり、乗り越えていったりする。その一方で、参加に至らない子ども・若者へのアウトリーチを得意とする支援団体とも協働しながら、健全育成活動と自立支援活動が相互乗り入れ的な関係性を築くことはこれからも必要な課題である。

以上のように、生命性・存在性の世界が子ども・若者の生きる意欲と心の糧であること、関係的自立の前提であることを確認したとき、コロナ禍以降はデジタル化･オンライン化に引きずられることなく、もう一度、生の全体性を回復すべく、直接的な体験と交流を軸に活動をより一層充実できるかが鍵となる。

特　集

よこはまユースの10年
―青少年育成とユースワークをつなぐ―

1 年表「よこはまユース10年の歩み」

社会の動き	本部事業・人材育成	施設運営・事業
▸▸2011年 東日本大震災 サッカー日本代表がFIFA女子ワールドカップ初優勝	（公財）よこはまユース設立 ※（社）横浜ボランティア協会（1974年設立）、（財）横浜市青少年科学普及協会（1983年設立）が合併し、2005年に（財）横浜市青少年育成協会が設立。公益財団法人化を受け、同協会時代に市民からの公募により決定し、多くの人に親しまれていた愛称「よこはまユース」を法人名とした。	青少年育成C 第３期指定管理受託 野島青少年研修C 第２期指定管理受託 野島青少年研修C 被災者避難場所に指定
▸▸2012年 「子ども子育て支援３法」成立 東京スカイツリー開業 山中伸弥氏 ノーベル賞受賞	知っておきたい！ 子ども・若者どこでも講座開始 子ども・若者 エンパワメントセミナー開始	西区寄り添い型生活支援事業 （かもん未来塾）運営受託
▸▸2013年 「いじめ防止対策推進法」成立 「子どもの貧困対策に関する法律」成立 横浜市保育所 待機児童ゼロ達成	「放課後３事業従事スタッフ人材育成・研修」充実 青少年居場所活動支援事業 ユースコーディネーター 養成研修開始	青少年の居場所・地域活動拠点連絡会開催 きずな★夏祭り実施 馬車道通信発行 体験キャンプ開催 のじま施設ボランティア養成
▸▸2014年 ＊インスタグラム流行 ＊横浜市人口370万人に	よこはまユースシンポジウム開催 札幌、横浜、京都の３都市相互評価会議開催	横浜・子ども青少年に関わる活動関係者の大交流会開始

社会の動き	本部事業・人材育成	施設運営・事業
▸▸2015年 川崎市中１男子生徒殺害事件	居場所の変容とこれからの居場所、職員に求められる力量の検討	野島青少年研修Ｃ体験プログラムの拡充
▸▸2016年 ＊ポケモンGOサービス開始 マイナンバー制度運用開始 選挙権年齢を18歳以上に引き下げ	横浜総合高校「ようこそカフェ」開始 よこはまユースゼミ開始 青少年の居場所に関するアンケート調査実施	青少年交流Ｃ閉館 青少年交流・活動支援スペース（さくらリビング）運営開始 青少年育成Ｃ第４期指定管理受託 野島青少年研修Ｃ第３期指定管理受託
▸▸2017年 「教育機会確保法」成立	法人本部を関内ホール地下から現在地に移転 「青少年の体験活動・社会活動に関する実態調査」実施 横浜総合高校「南三陸体験事業」実施	関内ホール改修工事に伴い青少年育成Ｃを代替施設で運営 さくらリビングに青少年委員会発足
▸▸2018年 ＊子ども食堂が広がる。全国で２２００カ所超に 	「第２期中期経営方針」に基づく取り組み開始 「中高生の放課後の過ごし方と体験活動」意識調査実施	青少年関係の情報発信のためのユースライブラリー開設
▸▸2019年 ラグビーワールドカップ日本で開催	地域の青少年関係者のネットワーク推進事業 「成人（成年）年齢引き下げに関する勉強会」開催	「アフリカを知ろう！ユースミートアップ」開催
▸▸2020年 新型コロナウイルス蔓延により「緊急事態宣言」発令 小学生新学習指導要領開始 東京オリンピック１年延期 ＊小中学生の自殺、過去最多に	青少年を対象とした交流・体験事業がほぼ中止となる 「Withコロナにおける体験活動座談会（少年５団体連携）」開催 「青少年の『成人』意識に関するヒアリング調査」実施	「緊急事態宣言」発令により３施設臨時休館（３月） 利用制限を設け３施設運営再開（６月） 「青少年の居場所づくり実践見学会」会場とオンラインのハイブリッド型で実施 体験プログラムに関する動画の作成・配信

2 職員座談会

「よこはまユースの事業から見る青少年育成の10年」

2011年に公益認定を受けてから10年。よこはまユースは学齢期から20代の青少年を主な対象として、その成長を支える事業に取組むとともに、「青少年を見守り・育む地域づくり」をすすめてきました。

この10年間は、東日本大震災から新型コロナウイルスのまん延に挟まれ、価値観が大きく変化した期間でしたが、私たちは、時代やニーズに応じながらさまざまな事業に取組んできました。

この座談会では、これまでの取組みを振り返りながら、変わってきたもの・私たちが変わらず大切にしていきたいものを語っています。

【参加者】
大　槻　繁　美（進行／事務局次長）
野　田　由　美（キッズ運営課長）
尾　崎　万里奈（事業企画課係長）
髙　橋　勇　一（野島青少年研修センター長）
富　岡　克　之（青少年育成センター長）
七　澤　淳　子（総務課係長）

※文中での表記について
「C」は「センター」の意味で使用しています。「キッズ（クラブ）」は「放課後キッズクラブ」の略です。

■「体験すること」の重要性

【大槻】 この座談会では、私たちが10年間で何に取組み、何を大切にしてきたのかを振り返ります。また、10年で変化したことや今感じていることなども聞かせてください。

【髙橋】 法人が公益認定を受けた10年ほど前から「青少年の成長にはさまざまな体験が必要だ」と言われるようになってきたと記憶しています。ユースでも体験機会の提供という役割が求められ、当時、青少年育成団体と連携してさまざまな体験プログラムを開発しました。私は横浜市の水源林がある山梨県道志村で実施する自然体験プログラム「道志村キャンプ」や、高校生が参画して実施する科学体験プログラム「サイエンスプログラム」などの新規事業を担当しました。

【富岡】 道志村キャンプは、青少年が自然に触れ仲間づくりができることだけでなく、複数の青少年団体と連携して実施したことが特徴です。団体の強みを生かしたプログラムが企画できました。

【髙橋】 サイエンスプログラムでは市立サイエンスフロンティア高校と連携し、天体観察や浜辺の生態観察、鶴見川河口の潮流を観察するための玩具のダックレースなどを実施しました。青少年が参加するだけでなく、高校生が企画や実施に関わることで、さまざまな「体験のかたち」が提供できたと思います。

【大槻】 事業企画課が2017年に市民3000人を対象に実施した「青少年期の体験活動・社会活動に関する実態調査」では、「青少年期に社会体験が豊富な人ほどコミュニケーション能力や、諦めずにやりぬく力が高い」という結果が明らかになり、「体験活動の重要性」が裏付けられました。今後も実践に加えて調査・研究などの取組みがますます重要になってくると思います。

■「主体的な活動」と「サービス提供」

【富岡】 野島青少年研修Cは、1978年から金沢区

野島公園内にある宿泊型研修施設として、青少年指導者・育成者の研修、学校や青少年団体の宿泊体験活動に利用されています。私が勤務していた15年前は、利用団体が主体的に活動できるようにサポートするのが職員の業務であり、利用者サービスの基本でした。それが震災の影響で海に近い研修Cの利用が減ったため、利用者を呼ぶために様々な体験プログラムの提供を始めました。この頃から研修Cの利用者に「サービスを買う」という意識が強くなったように思います。

【髙橋】 今ではプログラムの提供が研修Cのサービスとして求められていると思います。

【七澤】 他の施設と差別化を図らないといけないという意識はありましたか？

【富岡】 研修Cに来てもらわなければ、という意識はありました。でも、プログラムを提供すればするほど、団体の指導者や先生が育つ場を奪っているような気がするんです。研修Cの役割として本当にこれで良かったのか疑問に思うこともあります。

【髙橋】 確かにそうかもしれませんね。利用団体には宿泊時の（避難誘導などの）安全確認を自分たちで決めて、参加者に共有するようお願いしていました。特にコロナ禍で宿泊活動が減ったからなのか、指導者に経験がないからなのか、最近は細かい問い合わせが増えています。

【富岡】 最近はユースの役割も変化していて、体験の意義や効果の調査・発信など間接的な活動支援が増えています。ただし、コロナ禍で一層青少年の体験機会が減っていることを考えると、体験機会を提供していく必要性も感じます。「関わり過ぎると与えられるだけになってしまう」、そのさじ加減が難しいです。

■職員が育つ場とは

【富岡】 前身団体の「青少年育成協会」の頃から、磯子区岡村地区、神奈川区神大寺地区、鶴見区生麦地区における青少年の活動支援業務が市から移管され、地域や関係機関と連携して事業を調整していく役割を担っていました。

【大槻】 行政で決定された方針を地域や関係機関と調整していくことは、当時から求められていた役割の一つでしたね。

【富岡】 最近は中間支援を重点化していることもあり、事業を直接実施する機会が少なくなり、職員がイチから事業の企画実施に関わる機会が減っています。様々な団体と連携して事業を実施し、実施ノウハウだけでなくそこに関わった人たちの思いや考え方など、特に地域の人たちの感覚に触れる機会が少なくなっていることを残念に思います。

【野田】 確かにこの10年間で、地域の青少年活動が充実・継続できるようコーディネートする役割に変わってきましたね。

【七澤】 外郭団体のあり方が変わってきたことも一つの要因だと思います。ユースの「公益的使命とは何か」を考えた時、自分たちで直接実施するだけでなく、青少年育成に携わる人や団体を地域に増やしていくことが求められるからではないでしょうか。

【大槻】 これからも地域が主体的に活動できるようにしていくことは変わりませんが、直接実施する事業が減ったことで職員が育つ場や地域課題を把握する場が失われていることが課題だとすると、それに代わる場は何だと思いますか？

【尾崎】 私は担当事業で青少年育成活動に取組む地域の人と出会い、活動の楽しさ・難しさを知りましたし、交流C[1]では青少年の「居場所づくり」など現場を経験することができました。それが今の業務に活かされているので、ユースが青少年育成の現場を持つことの重要性を感じます。

【富岡】 例えば、地域の人たちと一緒に事業を実施すると、終了後に関係者と一杯やったり、地域の行事に顔を出したり。古い考え方かもしれませんがこういった場で、

1　横浜市青少年交流センター。建物の老朽化のため、2016年３月に閉鎖された。後出。

地域の人が求めているものや課題を知ることができたと思います。

【七澤】それは私も感じたことがあります。地域施設を活用して行政や地域の人たちと「青少年の居場所づくり」に取組んだ『生麦プロジェクト』では、当初、地域の人からは「青少年ナンタラから来た…何者？」と思われていたと思います。とにかく毎週通いました。青少年が来ない日もありましたが、そんな時は地域の人たちと話したり、話しているのをただ聞いていたり。そういう積み重ねがあって、徐々に受け入れてもらえるようになったと感じています。

【尾崎】そういった接点がないと、本当の意味で地域の情報を得ることが難しいですね。中間支援組織としての役割が強まったことで、青少年活動団体や行政と関わることが増えたと思いますが、その分、地域の人と直接関わる機会は減った気がします。

【髙橋】行政施策に基づく事業をユースが担って、かたちになるまで地域の人たちと一緒に作り上げていくことができれば、職員が育つ場として位置付けていけると思います。

■「中間支援」の役割

【尾崎】横浜総合高校のようこそカフェ[2]は予算も枠組みもない状態からスタートしましたが、現在は教育委員会からの補助金事業として事業化されています。事業として位置付けられたことで、学校がより主体的に事業運営に関わってくれるようになりました。

【富岡】ただ、学校の主体的な関わりが増えると校内だけで事業が完結してしまう傾向が強くなり、地域の関わりが少なくなってしまわないか心配です。

【尾崎】生徒と地域との接点として、カフェの機能はとても重要だと思っています。学校だけにお任せしてしまうと閉じていってしまうこともあるので、私たちのような外部の団体と学校が一緒に運営することで、活動を地域に開いておくことがとても大切だと思います。

【富岡】学校、地域、ユースの３者の関係は、前述の岡村地区や緑区で実施した十日市場中学校での地域交流事業のような関係を築いていくことが理想ですね。

【髙橋】岡村地区や十日市場地区の事業における今のユースの役割は、何か課題があった時の相談対応です。地域が主体的に活動できるようになるまでユースが学校と地域の間で丁寧に関わって、活動の定着と自立を促してきたからこそ今の関係ができたと思います。

【富岡】全国的に学習支援事業に企業の参入が増えていますが、事業終了とともに地域や子どもとの関わりも消えてしまうという声も聞こえてきます。でも、地域も子どもたちもずっとそこにいるので、人々が繋がる場として関わりを続けていくことが大切だと思います。

【尾崎】目的や達成指標が分かりやすい事業は、企業も参入しやすいのかもしれませんね。

【大槻】「体験活動」の話でも出てきましたが、青少年が関わる取組みを「サービス」として位置付けてしまうと、人と人のつながりは生まれてこないかもしれませんね。

■活動者の拠点のいま

【大槻】地域支援の話が出ましたが、青少年活動者や団体の拠点である青少年育成Ｃ[3]では、この10年で何か変化がありましたか？

【富岡】最近では活動者の講座参加が減少しています。

【尾崎】ボランティアに事前研修を行う団体が増えているので、育成Ｃの研修に参加する

2　横浜市立横浜総合高校で実施している居場所事業。校内のフリースペースでは無料で軽食が提供され、地域の大人やボランティアスタッフと交流できる場になっている。

3　青少年を支える活動や地域づくりをするための拠点として、研修室や情報コーナー、資料作りのための印刷室などを備えている。青少年を支える人材を育成するための各種研修や講座も随時実施している。

層も変化しているのかもしれないですね。

【七澤】私が勤務していた10年前は講座や研修に多くの参加がありました。ちょうど震災後で、ボランティアの重要性を誰もが認識していたことも影響していたと思います。

【富岡】育成Cは、1986年に青少年育成に携わる活動者や団体に活動の場や情報・講座などを提供するためにできた施設です。その時々によって、事業内容や参加者層は影響を受けるでしょうね。

【野田】研修参加者は、相談や情報収集のために参加していたとも考えられますよね。

【七澤】10年前は次々と新しい青少年課題が出てきて、知識が求められていた時期だと思います。「まず、知ろう」という感じ。今はネットで情報は手に入りやすくなっているから、わざわざ研修に参加しなくても…と考えるのは仕方ないと思います。ただ、研修は知識を得るだけでなく、様々な人たちが集まることで相互に元気や気付きを得られる機会になっていました。

【富岡】それについては今でも感じています。育成Cは単に学ぶだけでなく、横浜の各所から集まった参加者がコミュニティーを形成する場としての役割もありました。今は区ごとにコミュニティーの形成が進んできています。さらに、青少年に関する相談窓口の充実や研修を実施する団体も増えたと感じています。育成Cの役割も変化が求められていますね。

■つながりから生まれるもの

【大槻】育成C内に新たに作ったフリースペースについてはどうですか。

【富岡】コロナ禍の今は判断が難しいですが、育成Cにフリースペースが必要だったのか疑問に思うこともあります。例えば青少年団体の事務局機能の支援など、団体の活動支援機能のために有効活用した方が役割を果たせるのではと思います。

【髙橋】様々な団体がフリースペースに集まって活動すると楽しいだろうなというイメージがあったので、富岡さんがそのように感じているとは意外です。

【富岡】ラウンジのような場所には、人は集まるけれど情報が集まらない･残らないイメージがあります。人が行き交う所は風通しが良いけれど、ロビーワークのようにこちらから働きかけないと情報が得られないし、交流も生まれないです。もしここに青少年団体の事務局が集まっていれば、以前ユースの本部が育成C内にあった時のように、自然に情報が集まるのではないかと思ったりします。

【七澤】ユースの本部も今のオフィスビルに移転してから閉鎖的になったと感じることがあります。育成Cにあった頃は会員さんや団体の活動者が寄ってくれて、雑談から新しい情報を得ることがあったり、職員を紹介して新たなつながりができたり。

【富岡】最近はオンラインの研修も増えましたが、オンラインではまだまだ交流は生まれにくい状況があります。研修に参加して知識を得る＋αの「交流」や「仲間づくり」のニーズが薄まっているのかもしれませんね。

【大槻】コロナ禍で周囲との関係性が薄れ、人との話の中から知識を得る機会が失われていることも原因のひとつなのでしょうか。

【尾崎】自分でなんとかしなければと思ってしまうのかもしれませんね。人に相談するよりも、まずは自分自身や身内で解決できるように知識を身につけようと考えるのかもしれないですね。

【富岡】確かに、人に頼る人が少なくなってきていると感じます。

【大槻】関係性がないと、人に頼れなくて自分でやらざるを得ないことが増えますね。

【七澤】以前交流Cに勤務していた時、青少年には「人に尋ねることができる、相談できる人になってほしい」と職員同士で話をしたことを思い出しました。相談できる、助けて欲しいと言えるのは生きる力の一つだと久田先生[4]から伺ったこともあります。

■「居場所」は変化したのか？

【大槻】交流Cの話が出ました。青少年の居場所に関しては、この10年でどんな変化を感じていますか。

【髙橋】自分が居場所づくりで大切にしてきた「何もしなくても居ていいよ」といった考え方が許容されなくなってきていると感じます。

【尾崎】私が交流Cにいた頃は、何も目的がなくても誰もが自由に過ごせることに価値があって、青少年にとって意味があることだという共通認識が活動者や行政にもあったと思います。最近は「居場所」を社会参加へのステップに位置付ける考え方が主流になっているような感じもします。

【七澤】交流C開館時は全国的に「青少年の居場所ブーム」のようなものがあり、自分らしく居られる場の推進を行政も積極的にしていました。ここ10年で位置付けが変わってきたのでしょうか。

【大槻】20年ほど前からひきこもり状態にある若者が増えてきた背景もあり、地域ユースプラザ事業などの自立支援事業がクローズアップされてきました。ただ全ての青少年に社会参加のスタートラインに立ってもらうためにはプログラム化された居場所だけでなく自由に過ごせる場も必要ですよね。

【尾崎】「居場所」に来ている青少年の気持ちや居場所の必要性について、地域の人や活動者、行政も交えて共有できると良いと思います。

【大槻】「体験活動」の話でもサービスという話が出ましたが、青少年関連の施設や事業にも施設ごとの特徴やサービスなどが問われるようになったのでしょうか。

【髙橋】最近は指定管理制度を始めとした競争原理の中でプログラムの充実というキーワードで差別化を図ることが多く、青少年へのサービス提供がエスカレートしていく傾向があると感じています。施設側が一方的に考えたサービスへの満足度や評価が先行するのは問題だと思います。

【大槻】満足度という指標は大変判断が難しいですね。誰が何に対して満足しているか、しっかりと分析して効果や成果を把握することが重要だと思います。

■大人と青少年がつくる「小さな社会」

【大槻】居場所づくりの拠点として多くの青少年が利用した交流Cが、建物の耐震性の理由により2016年に現在の桜木町へ移り、「さくらリビング[5]」として２期目の運営をしています。交流Cは職員にとっても実践を通した学びの場でしたが、今のさくらリビングはどのような場になっているでしょうか。

【富岡】利用者層の変化の影響は大きいと思います。交流Cは青少年施設ですが大人の利用を制限していなかったので、スタッフ

4　久田邦明氏（故人）。元神奈川大学講師。地域の居場所づくり･コミュニティー形成に関する著書が多数ある。横浜市青少年交流センターの運営委員長を務めた。

5　正式名称は青少年交流・活動支援スペース。愛称さくらリビング。交流センターの後継施設として開設された。青少年が自由に立ち寄れる場として、交流コーナーや学習スペースの他、研修室や音楽スタジオなどを完備している。

以外の大人と青少年との交流も自然に生まれていました。結果、大人が青少年のことを理解する、青少年も大人を理解できる､そんな意味でお互いに良い環境だったと思います。

【髙橋】交流Cでは施設内に「小さな社会」を作っていくことを大切にし、多様な大人が利用していたので、黙っていてもそれができる環境がありました。さくらリビングもその理念を継承しましたが、コロナ禍でますます難しくなったように思います。

【大槻】コロナ禍では閉館を余儀なくされましたが利用者への影響はどうでしたか。

【髙橋】オンラインの活用が一気に進んだ気がします。2020年の閉館中もZOOMを活用し毎日青少年と交流できる時間を作りました。

■少なくなってきた多世代交流

【富岡】さくらリビングでは、大人と子どもが交わるチャンスはコロナ禍以前から少なかったように思います。ロビーでの交流に限らず、事業が子どもたちだけで完結してしまっていることが残念です。

【尾崎】外に出かけていって、地域の人と一緒に事業を実施するにはコーディネーターとしての力量が求められます。多様な大人が出入りしていた交流Cと同じことを今のさくらリビングでやることの難しさはあると思います。

【大槻】青少年がさくらリビングを通して出会う大人たちは主に青少年指導員や活動者で、彼らにとっては先生と同じイメージの人が多いと思います。交流Cにはルールを守らなかったり、大声で話をして迷惑がられたりする反面教師的な大人もいました（笑)。青少年が色々な大人と場を共有することで様々な気付きがあったと思います。

【髙橋】交流Ｃには、卓球大会やダンスや音楽の発表会など、青少年と大人が対等な立場で参加する機会がありました。卓球大会では青少年を打ち負かして高齢者が優勝したり、青少年と大人が一緒にダンスを踊ったり、楽しいだけでなくお互いを理解する機会になっていました。今後さくらリビングでも同様の機会を持つことは可能だと思います。

【七澤】青少年に関わる大人も楽しめる、という視点は大事ですね。

【髙橋】研修Ｃでは、子どもたちの就寝後に引率してきた大人達が交流を深める場を持つこともありました。今はコロナ禍の影響で飲酒は控えてもらっていますが、以前は乾杯程度なら許可していました。節度を守りながら、今後もそんな機会を大切にしていきたいと考えています。

また、勤労青年向けにお酒を飲みながら焚き火を囲んで話をする､「焚き火と日本酒の会」のような企画はどうだろうなんて、冗談とも本気ともつかない提案もあります。今の研修Ｃは学校が体験学習で利用することが多いので小中学生に目が向きがちですが、大学生や勤労青年を始めとする大人へのアプローチを考えても良いと思います。

【大槻】大学生が楽しい体験ができる場として利用が増えれば、それがきっかけで地域や青少年に繋がる活動をしてくれる人が増える可能性もありますね。

2012年から受託した寄り添い型生活支援事業も、プライバシー保護という制約はあるものの、子どもを中心に学生やシニアなど様々な世代が交流できるような運営を大切にしています。

【富岡】この事業は、生活困窮など支援を必要とする家庭の小・中学生等に対して基本的な生活・学習習慣を身に付け、将来自立した生活を送れるようにしていくことを目的にしています。なので表面的に見れば一人ひとりに何かのスキルを教え身につけさせれば済むサービスのように考えられがちですが、本質は子どもが「自分を大切にすること」に気付き、様々な人と交わりながら社会で「生きていく力」を身に付けてもらう事業です。

【髙橋】現場からは、コロナ禍によって居場所での直接的な交流は制限されましたが、逆

に個々の子どもとじっくりと学習に取り組んだり、保護者とゆっくりと話をしたりすることで、家庭が地域や学校などで孤立している様子を改めて確認できたという声を聴きました。

■放課後キッズクラブ

【大槻】最後のテーマとなりますが、「**放課後キッズクラブ事業**[6]」はどうでしょう。法律に基づく事業なので変化も大きかったのではないですか？

【髙橋】放課後キッズクラブは2004年にスタートし、2015年に全校展開しています。ユースでは10年前は18か所を運営し、増減を経て今では26か所となっています。

【野田】ユースの中間支援機能の重点化にともない、「運営」だけでなく団体支援にも力を入れてきました。2013年には、子ども子育て支援３法を基に放課後３事業における役割について内部で検討会を実施し、その年の秋に港南区から学童保育の運営支援を受託しました。これはユースとして放課後児童育成に軸足の一つを置くという検討会の方針を受けた対応でした。また、地域住民中心に運営されていた「はまっ子ふれあいスクール」からキッズクラブに転換する現場の不安を解消する目的で、2014年から『はまっ子キッズ交流事業』を立ち上げたほか、翌年には都筑区からキッズへの転換支援事業を受託しました。

【髙橋】児童福祉法が変わったこともあって、放課後児童育成事業も福祉色が増えてきたと感じています。また、ユースの中では珍しく、条例に基づき作成されたマニュアルのもとに実施する事業ですね。

【大槻】条例によって利用者数ごとのスタッフ配置数が決められていますね。

【野田】「放課後子ども教室事業」と「放課後児童健全育成事業」の両方を担うキッズクラブは、安全な遊びの場に加えて生活の場、更に子育て支援も期待されていて、現場のスタッフに求められることがどんどん増えて、制度に現場が追いついていない状況になりました。

【七澤】スタッフには地元の人も多くいますよね。地域の人だから出せる関係性と、青少年育成の専門性の両面が求められているように思います。

【野田】現場では常勤・非常勤に関わらず、キッズクラブに転換前のはまっ子ふれあいスクール時代から継続して従事する職員が多いです。子どもが好きだからという動機で関わる人も多く「専門性」という視点から関わっているスタッフは多くはないかもしれません。

■「制度」と「思い」のはざまで

【髙橋】今は改訂されましたが以前は、非常勤スタッフの資格要件の一つが「高校を卒業している」ことでした。はまっ子時代から従事していた経験豊富なスタッフの中には要件を満たさない人もいたので、その時は「地域で子どもを守ろうとする志の芽」が摘まれてしまうのではないかと感じました。

【大槻】キッズクラブは現場の役割がどんどん増えて、子どもへの気持ちだけでは関わりにくくなってきているのですね。地域では、寄り添い型の学習支援が始まったことで、中学校教師のＯＢが主体的に子どもを集めて勉強を教えていた活動がなくなったと聞いたことがあります。

【尾崎】ボランティアとプロのサービス、どちらか選べるのならプロの方を選ぶという市

6　小学校の施設を活用した放課後の居場所事業。「はまっ子ふれあいスクール」が「放課後キッズクラブ」に転換されていった。

民の意識の変化もあるのかもしれませんね。

【髙橋】そうだとしても、先程の教員ＯＢの地域活動のケースでは、公共のサービスができたからといって子どもの気持ちを確認しないで一方的に学習支援に移動させるようなことがなかったか心配です。キッズクラブの中にも、参加したくないと思っている子どももいると思います。でも、働いている保護者からすれば何かあった時に心配だからと、子どもの意思とは関係なく参加させてしまう。どうしても馴染めなくて辞めてしまうケースもあるけれど、無理矢理参加させられていると思っている子どもも少なくないと思います。

【野田】キッズクラブはプロとボランティアのどちらが良いということではなくて、決められたスタッフの数は確保した上で、地域のボランティアも受け入れ、どんな子どもたちでも安心安全な場所をつくっていきましょうという方針が示されています。

【大槻】地域のボランティアがキッズに入ってくるとキッズも地域に開かれますし、地域にも子どもを守る雰囲気が醸成されてくると思います。

■「すべての青少年に」

【富岡】ところで、放課後デイサービスができてから、キッズクラブでは障害児の利用に変化はありましたか。

【野田】保護者の選択肢は増えました。キッズクラブを利用しなくなった子どももいますが、週のうち半々にするとか、週に一回だけとか保護者の判断で色々です。

【髙橋】自分がキッズ運営課にいた頃は、小学校で一緒にいる子たちと過ごさせたいという理由でキッズクラブ以外は利用しない保護者もいました。

【富岡】障害児やサポートが必要な人が対象の事業が増えたことはとても喜ばしいことです。一方で、以前の交流Ｃのようにどんな人でも自由に来られる・参加できる場が減っていると感じます。運営が難しいとは思いますが…。

【髙橋】専門機関が増えると必然的に利用する人の棲み分けができてしまいますね。

【尾崎】その間を埋めていくのが、今までもこれからも、ユースの役割だと思います。

【七澤】ユースの理念は「すべての青少年」が健やかに成長できる社会づくりですからね！

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

【大槻】まだまだ話は尽きない様ですが、予定の時間になりました。この先も青少年の課題は変化し、ユースに求められる役割も変わっていくと思います。それでも、今日みんなが語ってくれたように、青少年の成長を見守り支援していくため何がよいのかを自問自答しながら、行政や保護者、地域の人たちとのつながりを大切にして取り組んでいく姿勢は変わらないと思います。今日はありがとうございました。

3 職員寄稿
「2011→2020→　」

公益財団法人よこはまユース
七澤　淳子

よこはまユースがスタートした10年前の春、私は不安な毎日を過ごしていた。

東日本大震災があり社会全体が不安感に覆われていた。横浜は被害こそ少なかったものの電力の使用制限があり、職場も関内の街もとても薄暗く、このことも心細さを増幅させていたように思う。不安は震災によるものだけでなかった。前年に大規模施設の指定管理者から外れたことで予算確保が難しくなり、公益法人化が決定した頃は人員の大幅な削減が決まっていた。去る仲間たちへの寂しさ、残る仲間たちと不安を共有しながら私たちは新法人のスタートを迎えた。

“お先真っ暗なスタート”は、「これからのキャリア」と私とを真剣に向き合わせた。結果、私は社会福祉士の取得を目指すことになったのだ。理由は２つ。ひとつは「これからの青少年支援は社会福祉の知識がないと務まらなくなるだろう」と考えていたこと。当時、子どもの貧困やひきこもりの長期化は深刻化しており、青少年そのものだけでなく家族を含めた支援が必要だと実感していた。そして、そのためには制度や法律に沿った学びが必要だと感じていた。ふたつめは「私を説明する何か」が欲しかったから。いったんは転職も考えた。しかし、いざ履歴書を書いてみると、「私が働いてきたこの10年弱は、対外的に価値のあるキャリアなんだろうか」と立ち止まってしまったのだ。大好きでやりがいのある仕事。それなりに実践を積み、頑張ってきた。けれど10年前の私は自信を持つことができなかった。悩んだ結果、「青少年分野で働く私を説明できるもの」として、当時“もっとも近い”と考えた社会福祉士という専門職を目指しながら、よこはまユースで働き続けることを選んだ。

配属先の育成センターで、2011年に企画した講座のチラシがここにある。タイトルは「実践から学ぶ『青少年に関わる大人の役割』」。説明文には「青少年の育ちに必要とされる、学校・家庭とは異なる空間における人づきあいを学ぶ機会は減っています。これらを学ぶ機会として、地域の大人の役割が期待されています。専門家でなくても青少年の育ちを支援できるようさまざまな立場から青少年に関わる大人から話を聞き、それぞれのフィールドに合った支援のあり方を考える講座です」と書かれている。

本誌にも寄稿いただいた萩原先生に導入とまとめ講義を担当していただき、青少年と関わる大人の話を聞いたり実践見学に行ったりなど、全８回２ヵ月に及ぶ内容だった。震災後、関わりの重要性を感じた人が多かったのか、50人を超える申込があり、仕事や活動を終えた大人たちが平日夜に集まり、「自分たちに何ができるか」を真剣に考えた。

振り返るとおもしろいのは、当時私は「自分を説明する何か」が欲しくて専門職を目指したにもかかわらず、「専門家でない大人こそ大切な存在」と考えていたことだ。講座では「明確化できない関係性」という言葉も使った。「親と子」「先生と生徒」「医師と患者」「相談員と相談者」など、説明できる関係性だけでなく、「たまに怒るけど『ご飯食べてる？』といつも心配してくれる地区センターのおばちゃん」だったり、「いつも寄るコンビニで部活帰りに『お疲れ様！』と言ってくれるバイトのお兄さん」だったり、青少年にとって「よく知らんけど、なんか知ってる大人」が地域の中に増えていくことが、どんな施設や支援制度を作

実践から学ぶ
青少年に関わる 大人の役割 講座
～地域の「居場所づくり」のために、今、大人ができること・知っておきたいこと～

2011年に実施した講座のチラシ。施設職員、会社員、行政職員、主婦など、さまざまな背景の人が参加し語り合った。

るよりも青少年育成にとって必要なことだと感じていた。

2014年には「地域・青少年・支援機関をつなぐ『ユースコーディネーター養成研修』」を実施した。児童相談所や教育委員会などの支援機関が「どんな人がいて何をやっているのか」「連絡をしたら子どもたちはどうなるのか」「地域にできることは何か」などを知り・考えるもので、こちらも定員を大幅に超える参加があった。

ちょうど社会福祉士資格を取得し、世の中には市民を助ける専門職や制度がたくさんあることを学んだ頃だった。地域の大人たちの「なんとなく、気になる」という感覚は、時に専門家の根拠に匹敵するくらい信頼できる感覚だということを私たちは知っている。しかし、青少年を守り支える制度や仕組みが整ったとしてもそこにつなげられる人が限られては意味がない。また、地域に根差した活動をしている人であればあるほど“専門職につなげる”ことの影響を考えて躊躇してしまうのではないか。このジレンマの解消を目指した。

これらの講座は、私が福祉を学んだから企画できたということではない。前身のボランティア協会・青少年育成協会を含む「よこはまユース」という組織にいるからこそ培われた価値観が前提にあるからだ。

横浜には行政機関やNPOをはじめさまざまな「青少年に関する支援機関や団体」があり、専門性をもった信頼できる職員がいる。また、地域で青少年たちのことを見守り、心配し、自分の時間と場を使って関わっている・関わろうとしている“専門家でない”大人たち（企業や団体）があちこちにいる。よこはまユースは、時に専門職として、時に地域の活動者として、両者をつなぎ、支え、一緒に「青少年を育む地域づくり」を実践していく組織である。そして、それが私たちの専門性だ。

わたしたちはさまざまなニーズに応えられる高度な知識や技術、幅広いネットワークを持つことだけではなく、「よこはまユースに聞いてみたら“きっと”力になってくれるだろう」といった、専門性を超えた“期待と信頼”を得ていくことが必要である。組織や職員そのものが信頼され、任せてもらえない限り、「つなぐ」「支える」という役割は果たせない。

.....

10年後の現在、志を同じくする職員は倍近くに増え、寄り添い型生活支援事業など新たな職場も増えた。私たちがずっと大切にしている「専門職（機関）と地域をつなぎ・支える」ということは、今では“中間支援”としてよこはまユースの中心的な役割となっている。私たちが取組む中間支援とは、行政やNPO等の青少年育成に取り組む団体・企業・学校・地域の間に立ち、ノウハウやネットワーク、情報を活用しながら中立的な立場で横浜の青少年育成活動を支えることだ。

コロナ禍の現在、地域では「活動ができない」という新たな課題が生まれている。そして企業からは「コロナ禍で大変な子どもたちのために何かできないか」と相談が入っている。

今日も本部や施設の職員たちは、地域に出向いて話を聞いたりオンラインで打合せをしたり、新しい事業のアイデアを話し合ったりしている。課題や役割は変化していっても、「一緒に青少年を育んでいく」という私たちの想いはこの先もずっと変わらない。

事業報告

2021年度 子ども・若者エンパワメントセミナー「3.11を振り返って～あの日の話、明日の話～」

第一部　講演会（要旨）

ノンフィクションライター
石井　光太

僕は10年前、『遺体』という本を書きました。その本は釜石にあった遺体安置所を舞台に、そこにいた人々がどのように東日本大震災の悲劇を受け止めてその先の人生を歩んでいこうとしていたのか、町がどのようにリスタートしていったのかを取材したものでした。

僕が当時の被災地の光景で強烈に覚えているのは、悲しみの底にいる人々の姿です。あるお年寄りは津波に流された車の中で亡くなっている身内を助け出す術がなく、傍に何時間も立っていました。大雪の降る中、がれきに置かれたご遺体たちをそのままさらしておくのがあまりにも不憫だからと言って、仲間が来るまで一人でずっと付き添っていた自衛隊員もいました。あるいは消防団員たちが謝りながら何かをしていたので見てみると、身体が曲がったまま死後硬直したご遺体を力ずくで真っ直ぐにしていました。同じ町の人たちですので、このご遺体がどなたなのか知っているわけです。にもかかわらず、担架に乗せる、ただそれだけのためにご遺体の腕を折るように真っ直ぐにしなければならなくて泣いているのです。そういったことがたくさんありました。

その時僕は、物書きとして何をすべきか考えました。そしてこの悲劇の中にいる人たちが何を見て、そこからどのように歩みを進めていくのかきちんと見つめなければならないと思いました。そこで取材場所として選んだのが遺体安置所でした。

そこでは、それまで全然ご遺体に接したこともないような市の職員たちが突然遺体安置所の管理を任されて、どうしていいか分からないままオロオロと働いていました。あるいは地域の歯科医が歯形で身元を確認したり、医師がDNA鑑定のための試料の採取や死因の特定をしたりしています。

遺体安置所は暖かくすると遺体の腐敗が進んでしまうのでものすごく寒いです。そんな所でご遺体の前に座り込み、泣いて謝り続ける人がいました。ようやく家族の遺体を見つけて、何でここにいるんだ、だめじゃないかと叫んでいる方もいらっしゃいました。10年前の遺体安置所という場所は、報道はされていませんでしたが、そういう所だったのです。

生後２カ月の赤ちゃんも亡くなりました。一緒に津波に流された母親は奇跡的に助かりましたが、ご両親は毎日遺体安置所に来て息子さんにずっと謝っていました。助けてあげられなくてごめんなさいと。

みんなが辛くて思わず目をそらしてしまう中、これは災害だからご両親は悪くないんですよと声を掛ける方がいました。そのお陰でもう一度この町で人間を信頼して生きていこうと思えたと、後日そのお父さんは言っていました。このように現場では多くの人がたまたま市の職員だった、医師会の会長だった、歯科医だったというそれぞれの立場の中で、誠意を尽くしてこの災害に必死に向

き合っていたのです。

そうして半年、１年と経つと、人々の日常も否応なく始まっていきますが、住む家が出来て仕事が再開されたからといって、すぐに震災前の気持ちに戻れるわけではありません。取材しているとだんだんそういった声が聞こえてくるようになりました。

たとえば、お化けの話や亡くなった人が夢に出て来たという話は、その年の夏ぐらいから増えてきた印象があります。震災直後は目の前の現実が圧倒的すぎて想像力の入り込む余地がなかったのでしょう。けれど日常生活が戻るにつれて、やはり夢でもいいから会いたいとか、あるいはどこかでお化けが出たと聞けば、自分の父親かもしれないと思う気持ちが出てきたのだと思います。

ある人の奥さんは津波で流され行方不明だったのですが、携帯電話だけが見つかりました。時々その故障した携帯がチカチカ光ると、その人は妻から連絡が来たと言ってすごく嬉しそうでした。彼らはいきなり日常に戻るのではなく、そういう思いを引きずり抱えながら生きています。そうして自分の心を支えていたのかもしれません。

でも、そういうふうにいかない人たちもたくさんいました。たとえば、ある女性は毎日夜中になると別人格になって叫び苦しみ、かい離性障害と診断されました。震災のショックを受け入れられずに自分とは別の人格をつくって現実逃避しているのです。

これは虐待などではよくある話で、あまりにも辛い現実を受け入れられないので、必死になって自分が生きるために別人格をつくるのです。このようにある意味で壊れていってしまう人たちも少なからずいました。

釜石ではご遺体の取り違えもありました。あるご夫婦が町で津波にあい、旦那様だけが助かりました。奥様のご遺体はすぐ見つかったので遺体安置所に運ばれ、火葬までの１週間、旦那様と娘さん、息子さんは毎日お母さんと向き合っていました。けれど１年後、息子さんがたまたまホームページに出ている新たな身元不明者を見て、服装や体格からどう考えてもお母さんとしか思えないと言い始めるのです。DNA 鑑定の結果、埋葬したのは別人で、身元不明者のほうが本物のお母さんだったことが判明しました。１週間、ずっと遺体安置所で顔を見ていたのに間違えるなんて信じられない話ですが、あれだけ大きな災害の特殊な空間で悲しみを背負ってその場にいるということは、それだけ極限の苦しいことなのです。

あるいは、人の死というのは必ずしも割り切れるものではありません。たとえば自分の親を長年の介護の末に亡くしたとします。その時、本当に全てをやり尽くしたと思えればある意味割り切れるかもしれません。だけど災害とか事件、事故、自殺などで亡くなった場合はある日突然、日常が理由もわからないままにぱっと切られてしまいます。その時に現実を受け入れるのはものすごく大変なことですし、それを遺族というのは何も自分が悪くなくても必ず自分のせいにします。

その上そういった悩みは１年２年で収まるものではありません。人生はいい時も悪い時もある、波のようなものです。その中で生きているうちに、ある日突然背負っているものを思い出し、心のバランスを崩してしまう人もいます。それでも人は普段そういったことを外に見せたら生きてはいけませんから隠しています。

こういう話をすると、その人たちに私は何が出来るのでしょうかとよく聞かれますが、そんな時僕は、あなたがしたいことをすればいいと思いますよ、と答えています。あなたの言葉や声はそれだけでとても温かいのですから、と。

たとえば先ほどのお化けの話は科学的にはあり得ませんよね。別に彼らだって本気で信じているわけじゃないかもしれない。でも、もしかしたら会えるかもしれないね、と言ってあげればその一言が、その人の救いになったり、心の支柱を肯定してあげたりすることになるかもしれません。

僕たちは支援というと何か物を送るとか、がれきを撤去するとか、決まり切ったものをやらなければという思いがあります。でも必ずしもそういうわかりやすいものがベストかと言うと、そうではないと思います。

たとえば僕がおもしろいと思ったのはこんな例です。被災地から少し内陸に入った所にとある雑貨屋があって、そこでは手芸が得意な店員が被災者を元気づけようと、買い物客に手作りのストラップを渡していました。いきなりストラップを渡されてどうするの、ちょっと迷惑じゃないかと思う人もいるかもしれません。でもやがてそのストラップは一つの名物というか、被災者の間で非常に人気が出て来ました。これを持っていれば震災のお守りになるとか、夢の中に亡くなった人が出てきて話ができると言われ始めたのです。

これは僕たちからすると被災地のちょっと不思議な話として流してしまいますが、被災者たちは亡くなった人に夢でもいいから会いたいと思っているわけです。あるいは災害に対してものすごい恐怖を抱えています。だからこそ親切で渡されたものに必死に自分の願いを託したのでしょう。

そう考えると、ストラップを渡すという行為は一般的な支援のやり方からは外れているかもしれないけれど、その人が自分に出来ることをやったら誰も想像しないような形で被災者の大切なものになったわけです。つまり決まったやり方でなくても、自分がいいと思ったことや得意なことをやれば、ほとんどの場合は苦しんでいる人に受け入れられるものなのです。

たとえば学校などでは一律に今日はこれをやりましょう、みたいにしてしまいがちですが、それよりも皆さんそれぞれがやりたいことを形にしたほうが、右に倣えでがれきを撤去しに行くより、もしかしたら辛い思いをしている人を支えることになるかもしれません。そういう支援のあり方がどれだけあるかということが、社会の豊かさにも繋がるのではないでしょうか。

このイベントを運営している横浜の実行委員の学生たちは今回、被災地に行った人もいれば行かなかった人もいますし、釜石とのミーティングで積極的だった人もいればそうでなかった人もいます。ただ一番大切なのは、このイベントを通して彼らが答えの出ない何かぐちゃぐちゃしたものをどれだけ心の中に抱え込めたかということだと僕は思っています。たとえば被災地に取材に行った学生たちが、被災者からおまえら何しに来たんだと言われ、怒られたということがありました。僕はその場にいませんでしたが、学生や引率の職員は相当動揺したそうです。これは非常にありがたいことだと僕は思います。被災者は今さら悪者になんてなりたくないのに、わざと厳しい言葉を言ってくれました。それによって学生たちは自分の考え方やアプローチの仕方が彼らと乖離していた、想像力がまだ足りていなかったことに気付けたと思います。

僕たちは辛く悲しい経験をした時でも日常を生きていかなければいけないから、普段はその思いを隠し、心の隅に追いやっていますよね。被災者も同じです。でも僕たちはその抑えているところしか見えないから、もう大丈夫なんだ、こんなにうまくいってすごいね、と思ってしまいます。ところが被災地に行くと、今まで明るく振る舞っていたおじいさんが突然涙を浮かべて当時のことを話したり、あるいは突然怒ったりというような体験をします。確かに町の物理的な復興はめざましく、もしかしたら震災前より素晴らしい近代的な町になっているかもしれません。でも心が完全に癒えることはないし、その体験が変わることもないわけです。そういったことを背負いながら彼らは生きていくということです。

我々はその部分に想像力を巡らせ、一生懸命考えなければなりません。たとえイコールになることはなくても必死に考えて、取り組んで、聞いて、やる。この繰り返ししかありません。これは災害だけでなく、すべてのことに言えると思います。学生たちにはそういうことを想像出来る人間に

なってほしいのです。それができないとこの先、生きていく上でものすごく大変です。そして今この年代でないと、なかなかそのきっかけは得られません。そういった意味で今回、学生たちがこのイベントを通していろんなことを学んでくれるのではないかと思っています。

最後に一つ、お伝えしたいことがあります。東日本大震災が起きた時、真っ先にある２人の編集者が僕に連絡をくれました。そして彼らにバックアップをしてもらい、僕は被災地に取材に行きました。

そのうちの１人は阪神淡路大震災の被災者でした。当時彼のお父さんが仕事で兵庫県にいて、住んでいた家が半壊したそうです。その時彼はまだ小学生だったのでよくわからなかったけれど、そのショックはすごくて、ずっと心の中にフックとして引っかかっていたそうです。だから東日本大震災が起きた時、彼はまだ駆け出しの編集者でしたが、真っ先に自分がやるべきことをやらなければと思って僕に頼み、カラーグラビアでものすごいページの特集記事を組みました。

もう１人も大学生のとき、たまたま出張していた父親から、阪神淡路大震災の被災地の現場を目に焼き付けろと言われて見に行ったそうです。その光景がずっと頭に残っていて、今回動いたと言っていました。

僕の本を映画化してくれた映画監督の君塚良一さんも同じようなことを言っていました。彼は震災のニュース映像に映るご遺体の姿を消す作業をしていたそうです。つまり映像の中からリアルにあったことをフィクションにしてしまう仕事をしていた。そのことがずっと心に残っていたので、それと向き合う映画をつくりたかったそうです。

なぜ今このような話をしたかと言うと、彼らのように、何かを体験した時に何も出来なかったということ、そしてそこに対して忸怩たる思いを持ったという経験が人生でものすごく重要なのです。たとえば今回参加した横浜の学生の中には、釜石にきちんと向き合えなかった、自分の役割をちゃんと果たせなかったという人もいるでしょう。その思いに真摯に向き合うことが重要です。だからこそ、10年後、20年後に何かあった時、その思いを取り戻そうと頑張るのです。人間ってやっぱりその連続だと僕は思います。

僕はこのイベントを通して、学生だけなく皆さんにもそういった思いや何かわからないモヤモヤしたものを一つでも与えることができればと思います。そしてそれを抱えて生きていく。そこで初めて僕たちは何かあった時に動けるような人間になるのではないか。本当に悲しみに暮れている人に真摯に向き合える人間になれるのではないかと思います。

石井　光太氏／ノンフィクションライター
国内外の貧困、災害、事件などをテーマに取材、執筆活動をおこなう。著書に『遺体　震災･津波の果てに』『43回の殺意 川崎市中１男子生徒殺害事件の真相』（新潮文庫）など多数。『こどもホスピスの奇跡―短い人生の「最期」をつくる―』（新潮社）にて第20回新潮ドキュメント賞受賞。

第二部　ディスカッション（要旨）

【ファシリテーター】 **石井　光太**（ノンフィクションライター）
【司会者】 **小林 美月**（大学生/エンパワメントセミナー実行委員会　委員長）
【参加者】 **寺澤 綾夏・氏家 望**（大学生/エンパワメントセミナー実行委員）
川原 凜乃・矢内 舞・田村 佳澄・三浦 滉平（釜石高校生徒）

【小林】 私は釜石に取材に行って、町の復興が進んでも心の面では未だに立ち直れない人がたくさんいるということがよくわかりました。

【寺澤】 私は八戸出身なので東日本大震災を近くで知ったつもりでいたけれど、取材してみると想定と違うことがたくさんありました。人に向き合うことや被災者に寄り添うことの意味を考えていろいろな葛藤がありました。

【氏家】 正直に言いますが、私は釜石の町を見た時にうらやましく思いました。私の故郷の福島県浪江町では家がどんどん解体されて、町が廃れていく様子を見てきたからです。その後釜石でいろいろな方からお話を聞く中で、大切な人を亡くしたのに自分の心が追いつかないまま復興が進み､気持ちが置いてけぼりにされてしまっている状況を知り、自分の考えも甘かったと気付かされました。

【石井】 津波の場合は全てが無くなってしまいますが、原発事故では町が残っているが故に家が取り壊されるのを見なければならなくて、納得がいかない部分もあるし、比較してうらやましく思えてしまったのでしょう。「復興」という単純なキーワードでは、被災者の本当の心の問題がわかりにくくなってしまいます。

【小林】 家が津波で流されなかった子が、逆に学校で差別された話も聞きました。被災者という言葉で一括りに出来ないと思いました。

【川原】 自分の家族ですらそれぞれ違う経験をしています。中学生のころ津波の体験談を録音して未来に残す活動をしていましたが、一人一人に生死の分かれ目がありました。

【矢内】 津波から逃げて高台から見た町の光景は今も忘れられません。まだ幼かった私はただ泣くことしかできませんでした。祖母は震災後に心が滅入ってうつ状態になり、今でも津波の映像は見たくないと言います。何年経ってもあの経験を忘れることは出来ないし、自分たちが語り継いでいかなければと思います。

【小林】 会場の方から、「被災地にボランティアに行ったけれど何も出来なかったと言う先輩がいた」というコメントをいただきました。

【石井】 出来なくてもその事実や自分の弱さをきちんと受け止めることの方が重要で、その経験があるから人は次に一生懸命頑張れるのです。
ところで事件や災害の記憶はどうしても風化します。でも原爆ドームが当時の高校生たちの必死の運動によって残ったように、自分たちにとって何が大切なのかという若者たちの思いは大人が下手に議論するよりも世の中を大きく動かし、やがて未来に残る何かをつくることになるのではないでしょうか。

【川原】 夢団※を作った太田夢さんが、自分たちは震災の経験を伝えられる最後の世代だと言っていたそうです。自分たちの活動が本当に未来に対して合っているのかわかりませんが、今出来ることを自分たちなりにやっているのかなと思います。

【石井】若い人が直感でこれをやりたい、やらなきゃいけないと思っていることは間違いなく正しいです。その気持ちが未来を変えることになると思うのでぜひ頑張ってください。
先ほど釜石高校と横浜の学生がそれぞれ作成した防災に関する動画を見ましたが、釜石の動画の方が素晴らしかったですね。同じ学生でもこれだけ認識が違うことがわかりました。横浜の学生はこれからさまざまな体験を重ねてその差を埋めていけばいいし、逆に横浜の学生の方が意識が高い部分もあるかもしれません。互いに高めあう関係性が理想だと思います。
横浜在住の釜石高校卒業生から「津波の経験を自分たちの言葉で伝えている後輩を頼もしく思った。」とコメントをいただきました。地元を離れた人たちはあの時何も出来なかったという思いがあるから、皆さんが真摯に10年前に向き合っていることを有難く思っています。それを重荷として背負う必要はないですが、君たちを応援している人たちがたくさんいることを忘れないでください。

【小林】石井さんから見て、この10年の被災地の変化はどうですか。

【石井】物理的な変化はあっても人の心はほとんど変わらないし、さらにいろんな思いや要素が加わって、より深く、より動いている部分があるかもしれません。
ただ周りの人間たちがそれに気付けず、いろんなものがずれてしまっているのではないでしょうか。皆さんの話を聞いていて思うのは、わかろうとする努力が足りないですよね。人ひとりの命が失われることがどんなに大変で、周りの多くの人に影響を与え苦しめることなのか、考えなければいけません。
戦争や虐待も同様で、いけないと言うのは簡単だし、親が子どもを殴ってはいけないのは当たり前です。では、なぜいけないのか。その背景にある悲劇や、殴られた子どもたちがその後どのような人生を送ることになるのかという点に目を向けなければ、本当の意味での防止とは言えません。そのような思考で防災についても考えることが重要なのです。

【田村】防災という言葉だけではその本当の意味がどこまで伝わるかわからないので難しいなと思いました。

【小林】被災した当時のことや、夢団として活動する中で感じたことを教えてください。

【川原】地域の繋がりや助け合いが大切だと感じました。自分たちの避難所には最初は物資が届かなかったので、被災していない家の人が食べ物を持ってきて、みんなで助け合って一緒に何日間も過ごしたことが印象に残っています。

【小林】私は自分のマンションの隣人の顔も知らないです。コミュニティをつくるのは理想だけど難しいし、それがいいと思って住んでいる人も多いと思うので、その中で災害時のことを考えておくのはすごく大切だと思います。

【寺澤】そうですね。災害時に、あそこの人いなくない？って気にかけられると被害状況はすごく変わってくると思います。

【小林】震災の時に地域の人が高齢者を迎えに行ったという話を聞いて、私の近所で同じことができるかなと思いました。コミュニティを作るのが難しくても、そういう人が地域にいることくらいは知っておきたいです。

【三浦】10年経っても見えない面での復興は全然進んでいません。自分はそこをどうにかしていきたいし、横浜以外の地域とも交流して防災意識をもっと広めていきたいです。

【氏家】テレビだけではわからない震災のまだ知られていない部分がたくさんあります。体験した人から直接話を聞いたり現地に行ったりしないとわからないことがあるし、私自身もまだ理解しきれていないと思います。そういうことをこれからも大切にしていきたいです。

※夢団：釜石高校生が立ち上げた、東日本大震災の教訓を伝承し防災活動に取り組むボランティアグループ。

ヨコハマの子ども・若者の成長を応援する人たちのための情報誌

YOKOHAMA EYE'S 2021

2022年３月　発行

■編集・発行

公益財団法人よこはまユース

〒231-0011 横浜市中区太田町2−23　横浜メディア・ビジネスセンター５階

TEL：045−662−4170　FAX：045−662−7645

Mail：kikaku@yokohama-youth.jp

URL：https://www.yokohama-youth.jp/